

図書 紹介

働かないアリに意義がある

著者:長谷川英祐 (北海道大学大学院)

発行 : ㈱メディアファクトリー / 〒104-0061 東京都中央区銀座 8-4-17 /

Tel. 03-5469-4740(編集部) / 新書判 / 189 頁 / 価格 777 円 (税別) / 2010 年 12 月 31 日

夏になると大きな荷を一所懸命運ぶアリの姿を誰でも見かけるが、実際にはその7割はボーッとしており、約1割は一生働かないことがわかってきたという。また、働かないアリがいるからこそ、組織が存続できるというのである。著者は人間が思わず身につまされてしまうエピソードを中心に、人間社会に例えながらよく耳にする話題でわりにきちんと説明されないテーマを分かりやすく解説している。

本書は、序章 (ヒトの社会、ムシの社会)とおわりに(変わる世界、終わらない世界)を除くと次の5章から構成されている。

第1章 7割のアリは休んでいる

第2章 働かないアリはなぜ存在するのか?

第3章 なんて他人のために働くのか?

第4章 自分がよければ

第5章 「群れ」か「個」か、それが問題だ

終章 その真価はなんのため?

小見出しの第1章では、アリは本当に働かないのか、働かないことの意味、なぜ上司がいなくてもうまく回るのか、若けりゃ子育て、年をとったら外へ行け!、アリに「職人」はいない、お馬鹿さんいたほうが成功する、兵隊アリは戦わないなどムシの社会に見られる集団行動の例とワーカーの働き方について、第2章では、「上司」はいないアリやハチの社会、よく働くアリ、働かないアリ、怠け者は仕事の量で変身する、遺伝で決まる腰の軽さ、経験や大きさと仕事は決まる、ハチやアリも過労死が、みんなが疲れると社会は続かない、規格ばかりの組織はダメなどで、ワーカーの個性が組織のどう作用するかについて、第3章では、子を生まない働きアリの謎、わが子より妹がかわいい4分の3仮説、美しすぎる理論のわけ、弟はいらない、ヒトの滅私奉公、生き残るのは群れか?、血縁か?など、ワーカーの個性が組織のどう作用するかについての解説である。第4章では、社会が回ると裏切り者が出る、本当に働かない裏切りアリ、なぜ裏切り者ははびこらないなど、一体

何のために彼らが働くのかなど、協力する個体間にも存在する個体の利益を確保するための争いについて、第5章では、庭のネコの生物学的見分け方、なぜ群れるのか、なぜ群れないのか、完全な個体、不完全な群体など、それでも集団で生き延びていくことの重要性を、終章では、食べ始めたとき、進化した、自然選択説の限界、神への長い道、説明できないという誠実さなど、新社会性生物の研究から見えてくる個体と社会がヒトの社会で果たす意味についての解説である。

「アリとキリギリス」という童話があるほど働き者のイメージがあるアリだが、何もせず、集団(コロニー)の役に立っていない働かないアリがいるからこそ、コロニーの生存確率が上るといふ。ふだん休んでいる「7割」も結果的には「いざと言うときに働く力になる」という形でコロニーが長く存続する力となると考えられる。生物の組織の存続に「多様性」は欠かせないが、多様性がないと伝染病に弱く、分業もスムーズにいかないという。一見無駄に思えるこのシステムを本書はわかりやすく面白く解説してくれる。何もしていないようでも、一匹も無駄なアリはいない。そんなアリ社会を知ると、なぜか元気が出てくるし、働かないことに意義があるとも言える。以前から雑学などで知られていたことやどうして働かないのかを科学的に分析した好著である。(学会事務局)。